

---

# 変態警察 24時

シャルロット党員N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変態警察24時

### 【Nコード】

N1641Y

### 【作者名】

シャルロット 党员N

### 【あらすじ】

厨二病とロリに侵された美少女、明科<sup>あかしな</sup> 鈴音<sup>りんね</sup>と普通平凡無個性のツッコミ役 飛高<sup>ひだか</sup> 軍<sup>いくさ</sup>の二人の人類警察独立機動部隊での活躍を描く。

## 第一話 物語の始まり？

「えー、そうですねアイツは一言で言えば、残念美少女、ですね。」

彼女の印象を人に訊くと大概の人はそう評した。

厨二病に冒され、ロリの鎖に絡めとられた哀れな変態。

で、ありながら『鬼装天鎧』セント・シュラウドなんていう特異能力を有する能力者でもある。

そんなデタラメなハイスペック馬鹿。それがアイツだ。

で、だ。

その当人が今目の前に居るんだが・・・

「貧乳に非ずんばロリに非ず！」

・・・こんな時、俺はどうしたら良いんでせう・・・

僕は飛高ひだか軍。いくさ

人類警察の特務課所属の平々凡々を絵に描いた様な凡人だ。

「なあ、飛高よ。我が心はロリと巨乳は共存し得ない、と言っているんだがキミはどう思うね。」

「知るか。」

この変態は明科あかしな 鈴音。りんね

誠に遺憾ながらこの変態は僕のパートナーらしいのだ。

しつとりと濡れたような艶やかな肩までかかる黒髪。

積もったばかりの雪を想起させる白い肌。

スレンダーでありながら出るところはしっかりと出た体つき。

「わかった、飛高。譲歩しよう。黒髪ロングと茶髪ショート、どちらがロリ萌の真理に近いと思う？」

「知るか、少し静かにしてなさい。」

「フツ、それは無理な相談だな。この私、明科　鈴音の口を塞ぐことなど出来るものか！」

「はあ………」

明科は掌を額にあて不敵に笑っている。

こういった事さえなければ普通に可愛いんだが……

正直どう対応していいかわかりません。

誰か教えて下さい……

本当、助けて、下さい……

「フフ、この世はまた我を拒絶するか……この深きロリの業、最早誰にも止められはせんよ。フフフフフ……」

ああ、主よマジで助けて下さい。

「アアーハッハッハッハッハッ！！さあ、奏でよう！哀しき懺悔のレクイエムを！！」

本当に、どうしてこうなった……

話は昨日、西暦の2467年の四月九日に遡ります。

その日僕は急に支部長補佐の鎌谷かまたに　蒼天そうてんさんに呼び出され、明科と双武デュオを組むよう命じられました。

あ、因みに双武デュオというのは仕事上のコンビの事。

なにやら各支部から幾人かずつの人員を集めて特務課独立機動部隊というものを創設するらしく日本国関東支部からは実動要員として僕と明科が選ばれたのだそうです。

で、今ここは人類警察専用の武装ヘリ、ブルーソードmk2の機内な訳です。

「フッフ、独立機動部隊か我には似合いの戦場だな。」

さつきから隣で明科が五月蠅いです。

「どうしたね、飛高。キミはさつきから静かすぎやしないかい？」

「明科が五月蠅すぎるだけだ。」

「つれないねえ、飛高。」

ククツ、と明科は面白そうに笑った。

知るか、つれなくて結構だ。

「あ、そうだ。飛高、私のことは鈴音、もしくはりんちゃんと呼びたまえ。」

「はあ!？」

「何を驚いているんだ。大丈夫、キミのことともこれからは飛高ではなくいーくんで行くか。うん、なかなか良いな。そうは思わんか? いーくん。」

「思うか!ー! 誰がいーくんか、誰が!ー」

変態な上に唐突なのかコイツは。

「我とキミは双武<sup>デュオ</sup>なのだから下の名前で呼ぶことに何の不思議もないじゃないか。」

「あるわ！なんで僕が明科にいーくんなぞと呼ばれる筋合いがあるんだー！」

「坊やだからさ（キリッ）」

「ガン〇ムネタはやめなさい！」

くっ、明科のペースに乗せられている。

落ち着け、落ち着くんた、僕。

「何を驚いているんだ。大丈夫、キミのことこれから飛高ではなくいーくんでいくか。うん、なかなか良いな。そうは思わんか？いーくん。」

「思つかー！誰がいーくんか、誰がー！」

変態な上に唐突なのかコイツは。

「我とキミは双武<sup>デュオ</sup>なのだから下の名前で呼ぶことに何の不思議もないじゃないか。」

「あるわ！なんで僕が明科にいーくんなぞと呼ばれる筋合いがあるんだー！」

絶叫してしまった。本気のツツコミをいれてしまった。

「明科 鈴音様、飛高 軍様もう少々で独立機動部隊の拠点、ジークフリード級飛空戦艦ビスマルクに到着します。座席に戻ってお待ち下さい。」

無機質な機械音声が僕たちに告げた。

「遂に到着だ。なあ、いーくん。」

「いーくんはやめろ。」

僕たちは座席に戻りシートベルトをしめながら喋り続ける。

そうしているとまた機械音声が僕たちに声をかける。

「ビスマルクが肉眼で確認可能な距離に達しました。モニターに画像を出力しますか？」

「ああ、頼もうか。」

そう答えたのは明科。

そうすると中央モニターにビスマルクの姿が映し出される。

「うお・・・・・・凄いな・・・・・・」

「これは、我も驚きを禁じえんな・・・・・・」

二人してビスマルクの姿に圧倒される。

紅に彩られたその姿は西洋の伝説にあるウェルシュドラゴンを思わせ、風格と威厳を兼ね備えている。

外装各部に装備されたエナジーカノン”ケラウノスmk27”が黒光りし、自らが戦艦である事を強く主張している。

また艦首部分には加速縮退粒子バリアフィールド展開システム”ネオアイギス”。

「着艦します。震動にご注意下さい。」

フイイイン・・・・・・

独特の排気音を発しながらブルーソードが右側面ハッチからビスマルクに着艦した。

「ビスマルクに着艦いたしました。長旅お疲れ様でした。」

機械音声がそう告げるがいなや明科が立ち上がり僕に向き直った。

「さあ行くぞ！いーくん！早く用意をしないか！！」

「なんでそんなハイなんだ、少し落ち着け。明科。」

「鈴音と呼べと言ったろう、いーくん。それに落ち着いていられるわけがなかるう！ビスマルクはフレキシブルヒューマノイドムーバー、通称ムーバー運用を目的として造られた艦だぞ！！」

「ああ、そういやオマエはロボオタだったっけか。」

「ロボじゃない！フレキシブルヒューマノイドムーバーだ！いいかそもそもムーバーというものは」

なにやらムーバーについて語り始めてしまった明科。

なにやらエネルギー力場制御がどうかよく解らんことを喋り始めたが興味があるわけではないので聞き流す。

「よし、降りるか。」

「ちよつと待てい。いーくん今は酷いんじゃないかね。」

「酷くない。早く来ないと置いてくぞ。」

僕は荷物を肩からかけ、へりを降りた。

明科は慌てて僕を追ってきた。

その瞬間、大量のムーバーに埋め尽くされたハンガー（格納庫）が目にはいつてきた。

そこはある種の異空間だった。整備オイルらしき臭いが充満し、人の熱気が空気に厚みを与えている。



「凄い、な。我もそれなりのマニアだと自負しているがここまで大量のムーバーを一度に見たのは始めてだ・・・」

呆けたように明科が声を漏らす。

「しかもどれもが各国の最新鋭機だ。」

「アメリカの プラストルver2・0、フランスのフルールハイマニューバー、ドイツのアイゼンレーヴェmk3。」

「そして極めつけは」

「日本の不知火蜻蛉しじぬいとたばに暁蟋蟀あかつき「おひびき」、だろう？」

「「!!」」

急に声をかけられた。その声は歴戦の兵士特有の重みを持っていた。威圧感とも威厳とも捉えられるような類いの重みをだ。

その声の主は驚く僕たちを興味津々と言ったような眼で見つめながら続けた。

「始めまして、日本国関東支部代表。私の名はエドウィン・ダークナイト。アメリカミネソタ支部代表だ。」

そして次の瞬間この男を信じられない言葉を口にした。

「所有性癖は黒髪巫女フェチだ！」

・・・世界・・・オワタ・・・

## 第二話 物語の始まり？

株式会社 ビープルポリス 人類警察。

2035年に組織された民間警備会社。

契約した地域全域を警備する事を売りにしており、”一国から一社まで”の売り文句はあまりにも有名。

現在112の国家が契約している世界規模の大会社。

そしてここはその人類警察の保有する戦艦ビスマルクのハンガー（格納庫）だ。

そのはずなのだが・・・

「所有性癖は黒髪巫女フェチだ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたね、飛高。世界オワタ的な顔して。」

「いやあ、驚かせるつもりはなかったんだが・・・」

「いや、我は特に気にしてないぞ。ヨロシク、ダークナイト氏。我の名は明科 鈴音。所有性癖はロリコンだ。」

明科とダークナイトさんががちりと握手を交わし、ニヤリと笑いあう。

「なに仲良くやってんだあああああ！！！」

「あ、復活した。いーくん、自己紹介したまえ。」

「したまえ、じゃねえ！いやするけども！！！」

「ハッハッハッハ、面白いな。お二人さん。」

「そりやどうも・・・始めまして、飛高 軍です。」

「飛高くんはどんな性癖をお持ちで？」

「ああ、なにやらいーくんは特殊性癖には目覚めていないらしい。残念がらな。」

「なにが残念ながら、だ。どこも残念じゃないわ。逆に明科が残念だ。」

「そんなに誉めるな。」

「誉めてない誉めてない。」

「ハッハッハ、にしても珍しいな。真人間だなんて。」

ダークナイトさんが口髭をいじりながら興味深そうに答えた。

「珍しい？」

「ああ、ここに来るような奴つてのは大概変態や良い意味での馬鹿が多いからな。」

苦笑するように笑い、ダークナイトさんはそう言う。

「ま、何はともあれ宜しく頼むぞ。飛高くん、明科くん。私のことはエドと呼んでくれ。」

「了解した、エド氏。」

「よろしく願います、エドさん。」

エドさんと軽く握手をする。硬くゴツゴツとしていた。

「ああ、そうだ私は艦長から君たちの案内を任されているんだが、どこか見てみたい所があるなら案内するが、先に個室に案内した方

「がいかい？」

廊下を歩きながらそう言われたので、先に個室に案内してもらったことにした。

「ええ、頼みますエドさん。明科もそれでいいな。」

僕は振り返り明科に声をかけ、つてあれ？明科がいないんだが・・・どこいった？

「明科？あれ、アイツどこいった？」

そんなことを言っていたら、向こうから走ってくる人影が。

「ハアツハアツ、置いてきぼりだとは、ハッ、つれないねえ、いーくん？」

「知るか、ついてきてると思ったんだ。それといーくんって呼ぶな。」

なんかウザかったのですげなくあしらった。

というよりロボットに夢中で置いてかれるって小学生か。コイツは。

「まあまあ、喧嘩しなさんな。さ、君たちの個室だ。」

「へえ、これが・・・」

「ほう、結構広いのだな。」

明科と僕は部屋に入り感嘆のような感情を含んだ声をもらした。個室は4・5畳ほどの広さで清潔感のある白い壁を有するものだった。

「凄いですねエドさん。乗員全てにこんな広い部屋が与えられるんですか？」

「いや、君たちがパイロット扱いだからさ。まあこの艦は火器管制なんかを量子コンピューターに制御させていて乗員の絶対数が少ないから普通より乗員の個室は広めだろうな。」

「ああ、なるほど」

ひとしきり部屋を整理して荷物を置き、僕と明科は部屋を出た。

その後はエドさんに艦の案内をもらった。

艦長に着任報告をしに行ったが忙しいらしく明日で良いと言われてしまった。

そして今ここはビスマルク居住区中央に位置する乗員食堂”Silver Spoon”。

「いやしかし、ムグムグ、この艦は凄いな。ムグムグ、特に見たか？ いーくん。ムグ、あの量子コンピューター！」

「物を食べながら喋るな。あといーくんって呼ぶな。」

僕の隣で明科が七倍力ツカレーを掻きこみながら話かけてくるので軽くあしらう。

「まあ、量子コンピューターに興奮するのはわかる。しかもビスマルクのは新型の”ヴァイスバイゼ”だしな。」

「ヴァイスバイゼ？」

「ああ。ドイツ技術者の叡知の結晶、アルメティヒシステムを搭載した超高度演算処理能力を持つ新型だ。」

「その通りデス。我らドイツ人の優秀さを世界に知らしめた素晴らしい発明なのデスヨー。」

後ろから声をかけられた。エドさんの時にもそんな感じだったな。今日はそういう日なのか？

というか今の声、妙に幼い感じだったな。

振り向き、声の正体を確認して僕は驚愕した。

そこに居たのはどうみても小学生にしか見えない少女だったのだ。

「ロリっ娘キターーーー（。。。）！！！！！！！！」

「ぎゃああああああ。な、なにするデスカー！」

明科がロリっ娘に抱きついて頬擦りを強行している！！  
しまった！！明科がロリコンなの忘れてた！

「キミCawaii！私の嫁えええええ！！」

「誰があんたの嫁デスカー！！」

そして声の主、その少女は確かに明科が言うように可愛い顔立ちをしていた。

頭髮は美しいショートの新髪で見る者に健康的なイメージを与え、  
元々の少女の愛らしさを底上げしている。

「嫁においで！いやもうする！決めた！！キミは私の嫁！」

「勝手に決めるなデス！！」

ゲシッゲシッゲシッ

少女は三発ほど明科に蹴りをいれ拘束から逃れた。

もう、半ば涙目になっている。

明科はロリっ娘に蹴ってもらえて悶えている。コイツ真面目にキモ

い・・・

少女が涙目になるのも解る気がする。

まあ、急に変態に迫られれば当たり前な気もする。

「うつ・・・ワタシに百合属性は無いのデス！ワタシはクーデレ風紀委員フエチなのデス！！」

ん？あれ？なんか耳おかしくなった？とっても不思議な言葉が聞こえたぞ？

「クールがデレる事で氷と炎が調和して、美しさを作り出すのデス！！そこへ風紀委員属性！たまらんデス！！」

また変態だああああああああああ！！  
今度はマイノリティな変態か！！

「フツ、我は百合属性ではない！我は、ロリコンだああああああああああ！！」

明科、お前もやめろオオオオ！！  
張り合うなあああああああああ！！

「黙りなさいデス、ロリコン！このワタシ、アウラ・アインホルンと勝負しなサイ！」

「勝負？我がか？」

「そうデス！一週間やるデス！その間にムーバーに慣れておけデス！！」

「ムーバーでこの我、オンラインムーバーシュミレーターで百戦錬磨の明科 鈴音に勝負を挑もうというのか！」

「その通りデス！実戦とシュミレーターの違いを教えてやるデス！ワタシが勝つたら二度とワタシに近づくなデス！」

「フフン、良からう！だが、アウラたんが敗れた暁には！君に一週間ピンクのワンピースとランドセルを装備してもらおう！」  
「その条件、のんでやるデスー！」  
もう嫌だ………あ、この盛り蕎麦のワサビ旨い。

- 明科 鈴音の個室 -

「はあ！？ムーバーに一度も乗ったことがない！？」

明科と僕は明科の部屋であの少女、アウラ・アインホルンとの勝負に勝つため、策を練っていた。  
練っていたのだが……

「ああ、我は基本的にはただのマニアだからな。乗ったことは一度も無い。」

「胸を張って言うことか！！じゃあなんで勝負をつけた！」

明科がムーバーに一度も乗ったことが無いなどとふざけた事をぬかすので話が全く進まない。

「何故、だと？」

「ぼ「坊やだからさ以外でな。」う……いーくんのいけず……」

拗ねた明科は可愛かった。いつも普通にしていれば僕はコイツに惚れてたかもな、と感じる程に。

「……まあ、いいや。よし、明科。まずは知識から確認していこうか。」



「了解した、いーくん。えー、まず……」

ムーバーとは直訳すれば動くもの、だな。

フレキシブルな機動が可能な人型兵器。故にフレキシブルヒューマノイドムーバー、な訳だ。

その始まりは2417年に日本人技師 おおいまち 王居町 あくた 芥工学博士によって作られた宇宙空間作業用パワーローダーの発明だ。

王居町博士は火星でのみ生成される特殊金属、ディオシウムと金属粒子、エーテリオンを用い、パワーローダーの大量生産を可能とした。

また、パワーローダーの大量生産は火星経済に大きな利益をもたらした訳だな。

そしてそれがあつたが故に今の火星の発展がある訳だ。

ん？何だ、いーくん。パワーローダーの話は良いから早くムーバーの話をしる？

フフン、関係無い話をこの我、明科 鈴音がすると思うか？

え、思う？えー……まあ、良いか。

で、だ。パワーローダーは大量生産された事で価格が安くなり世界中で運用されるようになった。

もちろん、軍事的にもな。

パワーローダーを強化・発展させる中で発明されたのがムーバーなんだ。

それが確か2437年だ。

ムーバーは軍事というものを変えた。

レーダー等の電子装備の発達過剰で戦闘は有視界戦闘に逆戻りして

いたからな。

その条件下において四肢を用いたフレキシブルな駆動が可能なムーバーは圧倒的だったんだ。

空だろうと、海だろうと、陸だろうとね。

また、ムーバーは動力機関に利用したエーテリオンの影響から操縦者に特殊能力が発現する。

ちなみに我の能力、『鬼装天鎧』もエーテリオンを用いた薬の副作用だ。

で、そんなこんなで色々有って2467年の今現在ムーバーは第9世代型が主力となっている。  
今各国で次世代型が開発中らしい。

「・・・と、まあこんなところだ。いーくん。」

「・・・成る程、まあマニアを自称するだけの知識はあるわけだ・・・で、相手の、アウラ・アインホルンって言ったっけ、のデータは有るか？」

基本的な要項確認を終え、次の因子を要求した。

「ああ有るぞ。いーくん。と、言ってもあの後に集めたデータだから少し少ないが。」

「まあ、良しさ。で？あの娘はどんなパイロットなんだ？」

「えーと、元ドイツ空軍中尉。何度かドイツ軍の公開訓練にでてるな。かなりの腕だ。」

「かなりの腕だ、ってのはどれくらいなんだ？」

率直な疑問をぶつけてみる。



で、一週間後。

ここはビスマルクのムーバーハンガー。

アインホルンと明科が対峙している。

明科は奇妙な自信に満ちた眼で、アインホルンは金剛力士もかくやという感じの敵意に満ちた眼で明科を睨んでいる。

「アウラたん。良い勝負にしようじゃないか。」

「フンツ。こてんぱんにしてやるデス!!!」

二人は握手をして各々機体に取り込んだ。

アインホルンは赤くペイントされたアイゼンレーヴエのカスタムタイプ。

背部に大型のフレキシブルブースターを備え機体各所にバーニアが増設された高機動型だ。

武装はサブマシンガン”Bt17”と小型ナイフ。

明科はビスマルクにあった日本の不知火蜻蛉。

淡い青色をしており背部にはウイングブースターが装備されている。腰部両側面にはレールカノン”鞍馬”。肩部には分子振動<sup>バイブレート</sup>ソードが装備された万能型。

「両者用意はいいか？」

審判を務めてもらっているエドさんが二人に呼び掛ける。

「システムオールグリーン。我はいつでも良いぞ!」

「ワタシはいつでも臨戦体勢デス!!!」

「ようし、それではっ!!」

「バトル・スタート!!」

二人のムーバーが発艦し、勝負が始まった。

### 第三話 物語の始まり？（前書き）

遅くなりました。

変態警察24時第三話です。

戦闘シーンが書けなくて苦しんだ結果、そこまで戦闘シーンの描写をいれないことで妥協してしまいました。

後々戦闘シーンが書けるようになったらアップグレードしたいと思います。

それでは変態警察24時、楽しんでいただけたら幸いです。

### 第三話 物語の始まり？

- ムーバーパイロットに発現する特殊能力 -

・第一項 特殊能力の発現理由、またその基本原理

ムーバーに一定時間以上搭乗したパイロットは等しく特殊な能力が発現する。

その能力は人によって異なり、またこの能力はムーバーを通して発動する事が可能である。

この能力発現は動力源として利用しているエーテリオンの影響によるもので、時たまエーテリオンを利用した医療を行われて発現する者も少なからずいる。

人体はエーテリオンを体内に吸収し感知するとそれを増幅するようになっている。

その増幅したエーテリオンを媒質にして深層意識を具現化した物が特殊能力なのだ。

・第二項 能力の強弱による区分

この能力は強さによって

いくつかの段階に区別されている。

第一段階 発現する

第二段階 自由行使が可能になる

第三段階 細かい微調整が可能になる

第四段階 二次発現と呼ばれる能力の進化がおこる

第五段階 最終発現と呼ばれる能力進化の最終段階

以上の五段階に区別されている。

現状、第五段階に至っているのは世界に一人しかない。

現在能力は約二百種確認されている。

特殊能力に関する基本事項二種を思い出しながら僕はビスマルクの  
発艦カタパルトにそびえる明科の機体 不知火蜻蛉を見つめる。

「明科 鈴音！発艦するっ！！」

デヂデヂッ

カタパルトが火花を散らしながら不知火蜻蛉がビスマルクを発艦し  
た。

「アウラ・アインホルン発進するデスっ！！」続いて明科の対戦相  
手、アウラ・アインホルンの機体がカタパルトから発艦していく。

この模擬戦は無害なレーザー光線を用いて行う。

レーザーが敵機体に照射され、命中すると機体の各部カメラがそれ  
を認識し制御コンピュータに転送、実弾の場合のダメージを想定し  
てポイントに換算する。

そして制限時間内にとったポイントを競うものだ。

今回の模擬戦は制限時間30分。

明科のスタミナだとギリギリといったところだ。

「本当に世話がやける…」

僕は明科の回避マニューバを注視しながら呟いた。



明科はアインホルンに一方的に攻められている。

回避で手一杯、といった感じだ。

対するアインホルンは余裕綽々という風に円運動を織り交ぜたマニユーバを行いながら堅実にポイントを稼いでいつている。

『デカイ口叩いた割には大したことないデスっ！！』

『くうっ…！！』

アインホルンのライフルが火を吹き、レーザーポイントがコックピット部分に達する。

これでポイントは明科とアインホルンそれぞれ3：25。

残り時間は13分、なかなかにキツイ戦いだ。

Gが邪魔をしていなければ明科にも勝機がある…明科はオンラインシュミレーターならSクラス、つまり世界大会レベルということだ。

だが、その上手さ故にGという普段とは違うファクターの影響を強く受けるのだ。

だが、明科のスゴいところはそんな状況下にあっても状況にのまれないところだ。

そう、例えばこんな。『墜ちろデス、ロリコンッ！！』

『ロリコンはア、諦めないっ！！』

『黙れデスッ、この性犯罪者ア！！』

『ロリコンはっ、性犯罪者に非ずっ！！』

『クーデレの前にひれ伏せデスッ！』

・・・なにこの掛け合い。2ちゃんるかよ。

一瞬明科の味方すんのやめようかと思っちまったぜ。

そんな馬鹿な掛け合いをしながらも明科は回避を続けている。

『どうしたあ？アウラたんっ！！当たっておらんぞお！！』  
『くっ…舐めるなデス！』

アインホルンは射撃を続ける。  
だがアインホルンの弾はことごとく明科に避けられている。

明科がGに順応してきた為だろう。  
訓練段階でもGはかかるが対人戦はコンピュータ戦とは違う。  
人間の感情に左右される戦いはコンピュータには再現できない。  
だが、そのコンピュータ戦も意味はあったようだ。  
でなければこんなに早くGに順応できる訳はないからな。

『ハッハアーツ！！みなぎってきたああ！！』  
『ダマリナサイ！！』

二人は傍目から見ると仲良いように見えるんだが…

『アウラたんマジペロペロオ！！』  
『変態、墜ちろデスウウ！！』

まあ、気のせいだな。

つーか明科何やってんだよ。真面目に勝負しろよ。  
と、ここでポイント確認だ。

明科：27  
アインホルン：30

明科はちょこちょこポイントを稼いでいたようで二人のポイント  
差はかなり縮まっている。  
アインホルンは明科憎しで序盤にとばし過ぎたのが響いてきたのか  
中々ポイントを得られていない。

「さあ明科…もう少しだ。耐えろよ…」

「了解つ、いーくん！勝利の栄光を君に！！」

明科は訓練時のペースを保っていたからか俺と会話を交わす余力もあるようだ。

残り時間は3分。明科は最後の追い討ちをかける為にブースターをふかしてアインホルンにむかっていく。

と、その刹那。

ビキュウウン

一条のビームが明科とアインホルンのすぐ傍をかすめた。

「何！？」

「なっ！？」

「なんデスっ！？」

我がアウラさんに突撃を敢行したその時、突如ビームをかすめたのだ。

赤色に輝くそのビームは我とアウラさんの右横をかすめて四散した。

「いーくん！そちらでなにか確認していないか！」

『いや、何もない。熱センサ、長距離光学カメラ、赤外線カメラ、すべて無反応だ！』

「ビーム来るデス！！」

「ちいっ！」

ビキュウウンビキュウウンビキュウウン

ビームが我らにむかってくる。我はウイングブースターを展開して上昇と下降を繰り返しながらビームを回避する。

「アウラたん、なにか確認していないか！」

「何も反応しないデス！ビームの集束率はあまり高くないデス。長距離狙撃だと思うデスー！」

「長距離狙撃だとお……」

『いや、違うよ……今のビームは私のものだ……フッフ、人類警察もなかなか平和ボケしていると見える。』

「……！」

突然流入してきた謎の声を聴き、我らは体をかたくする。

そして通信電波が発せられた方向に機体を向き直らせた我らは驚くべき物を目にした。

何も無かった場所にムーバーが現れたのだ。

その機体 後々我らが幾度となく戦うことになるその黒い機体が。

「そんな馬鹿な！アレはっ！アイツはっ……！」

飛高くんが動揺している。突如出現した黒い機体を目にした途端、取り乱し始めたのだ。

なにか知っているのだろうか。

「大丈夫か？飛高くん。」

「……ええ、大丈夫です。すいませんエドさん、ここ任せて良いです

か。」

「ああ、別に良いが…って、どこに行くんだ？」

飛高くんは何やらこの場を任せて走り去ってしまった。  
何がなんだか。

冷静な飛高くんにしては珍しい取り乱し様だ。  
まあ、いいか。

「誰か！艦長に報告を頼む！！」

「はい！！」

整備士の一人に声をかけ、私は自分の機体に向かった。  
すぐにでも出撃して、鈴音くんたちを援護しなけりやあならん。

「さあ、君は何者だい？」

私は一人、謎の襲撃者に問いかけた。

「エドウィン・ダークナイト！　ブラストル・【ジョーカー】出撃  
する！！」

迂闊だった。

高い可能性でこの襲撃はあり得たのに、その存在を考えつかないな  
んて。

「自分が思ってる以上に俺は舞い上がっているらしいな。」

まさか明科、いや鈴音との再会にここまで心を乱されるとはな。  
たかがかつての幼馴染みとの再会だ、ってだけなのに。

何故だ。

何故お前は、記憶をなくした筈のお前がかつてのお前と同じように俺を「いーくん」だなんて呼ぶんだ…

「鈴…音…お前を。俺はお前を守りたかっただけなのに…どうして、お前は…」

「やあどうしたね、飛高くん。」

「…エドさん。アレはどうなりました？」

「あの黒いのなら私がでたら直ぐに撤退してしまつたよ。」

「ハハッ、流石ですね。」

「まあ大した事ではないさ、ただ単に数の力を警戒して撤退してくれただけだろうさ。」

乾いた笑いをもらす飛高くん。なんだかその姿は私をひどく不安にさせる。

。

「俺は昔、あの敵の仲間だつたんですよ。」

「ほう。それはまた。」

…うん、まあ可能性の1つとして考えてはいたがやっぱり驚くなあ。

「話…聞いてくれますか？」

「ああ、良いよ。聞こう、だがその代わりと言ってはなんだが後で私の巫女談義に付き合ってもらうがね。」

「どうしよう、一瞬話聞いてもらうの止めようかと思っしまいましたよ。」

「てことは、話すんだね？」

「ええ。じゃあ、よろしく願いしますね。」

「そうですね。最初は僕と鈴音との邂逅の場面から、ですか。」

「鈴音と始めて出会ったのは五歳の時です。」

「両親どうしの仲がよかったからなし崩しというかまあある種必然的に僕と鈴音は出会ったんですよ。」

「初めに会った時の明科は、そうですねえまあ可憐だとかそういう類いの言葉の似合う娘だった。」

「なんとなく予想はついてると思いますけど僕は鈴音に一目惚れしたんですよ。初恋でした。」

「まあ、その初恋は現在進行形で継続してるんですが。」「話が反れましたね。で、まあなんやかんやあって僕と鈴音はよく遊ぶようになったんですよ。」

「二人で鬼ごっこをして、かくれんぼをして、トランプをしました。」

「二人で色んな事をしましたよ。毎日が楽しかった。」

「そんなような関係がまあ十五歳くらいまで続きました。」

「そう、十五歳まででした。」

「十五歳の誕生日、鈴音が倒れたんです。」

「鈴音は生まれつきある能力が異常なほど高くて体がそれを完全に制御できていなかった事が原因でした。」

「その能力っていうのがエーテリオン増幅の能力です。」

「鈴音のエーテリオン増幅能力は常人の十数倍だったんです。」

「まあ、エーテリオン増幅能力の強弱が能力の強弱なわけですから、当然色んな輩が鈴音を欲しがりました。」

「国、会社、学校…ほんとに色んな奴がアイツを欲しがった。」

「あの日からアイツの、鈴音の人生は変わってしまったんですよ。」

「そして、あの事件が起こった。起こるべくして、ね。」

「聞いたことくらいはあると思いますよ。思想家集団”正義の夜明け”に鈴音がさらわれたんですよ、僕の目の前でね。」

「事件はすぐに収束しました。”正義の夜明け”も解体されました。」

「でも鈴音はその時のショックで記憶をなくしました。」

「僕は自分を呪いましたよ。自分が非力なガキだったばかりに鈴音につらい思いをさせてしまったんですから。」

「そこで僕は力を求めて家を出ました。」

「軍は人類警察の台頭で形骸化してました。人類警察の入社可能年



齡は十九からですし、僕が力を手に入れられる場所は裏社会にしか無かったんですよ。」

「そんな僕が入ったのが傭兵組織”朱の剣”でした。」

「”朱の剣”、か…道理で感じた事のある気配がするわけだ。」

「僕は最前線に出てましたからエドさんとやった事もあると思いますよ。」

驚くべき事を話したつもりなんだがエドさんの反応は淡白だった。けれど今はそれがありがたい、話したおかげで気持ちの整理ができた。

「てことはあの敵は”朱の剣”ってことかい？」

「ええ、アレは”朱の剣”が独自開発した電磁迷彩搭載機、クアルソ・ディア・ズイクのエースカスタムです。」

「でも君はどうやって人類警察に入ったんだい？元テロリストみたいなものだろう？」

「ああそれは、僕はある戦いで戦没認定されてる筈だったんですよ。」

「戦没認定？」

「ええ、今の人類警察日本支部長の一人、鎌谷さんに救われて”朱の剣”から脱けたんです。その後司法取引を行った後で鎌谷さんに便宜を図ってもらって人類警察に入ったんです。」

「ああ…司法取引。なるほど、納得だ。」

司法取引。

国際共有刑法の施行により、すべての国家の刑法を同一のものにし

た際、すべての国家で解禁されたシステムだ。  
簡単に言えば逮捕された犯罪者が他の犯罪者の情報で自身の刑罰を  
軽減するシステムだ。

「てことはあの敵は君を狙って？」

「ええおそらくは。生きていた事がばれて口封じの意味合いを持っ  
て襲撃してきたんだと思います。」

「なるほど。この事を艦長は知っているのかい？」

「まだ知らないかと。まあ、襲撃があつた以上遠からず連絡がいく  
とは思いますが。」

「………なら問題は無いか。よし、じゃあハンガーに戻るか。」

「はい。そうですね、鈴音とアインホルンの勝負の決着もつけなき  
やならないですし。」

「ああそうだな。」

「……」

「……」

「……ありがとうございます、話聞いてくれて。」

「どういたしまして。まあ巫女談義に付き合ってもらうのだからお  
あいこさ。」

「しまった、忘れてた！」

「フッフ、覚悟しておくといい。」

そんな話をしながら僕とエドさんは鈴音のところに戻ったのだっ  
た。

「ちっ、ダークナイトの野郎が出てこなきゃ飛高の野郎を潰せたん  
だ。」

件の黒い機体のコックピットで金髪碧眼の青年が毒づいた。

『アハハハッざまあwww』

「黙れ、ソロ。ぶっ殺すぞ。」

ソロと呼ばれた声は通信先から青年を嘲笑している。

『だって、ブッ、ダークナイトに圧されて逃げてきたんだろwww』

「違うわ、戦略的撤退だ。」

『同じだしwww言い訳乙www』

「てめえ……」

青年の声がしだいに怒気を孕んだものになる。

『お前たちの仲が良いの分かった。早く帰ってこい、モルテ。』

「わかりました、師匠。」

一通りの報告を終えた青年は通信を切った。

青年の名はモルテ・フェスティヴィタ。

”朱の剣”のエースにして祝祭の死神の二つ名を戴く男であった。

まあ、一つの物語の始まりの終り。

あの後で鈴音はアインホルンと再度勝負し、僅差で勝利を掴んだ。で約束どおりアインホルンは一日ランドセルを背負って過ごした。

まあ、後は僕が急に鈴音を名前で呼ぶようにしたらアイツが前より五月蠅くなっただけか。

ついでに前より可愛くなった。

……………すいませんでした。

カッとなってやりました。後悔はしていません。

と、まあ色々あって。

そんなこんなでこの僕 飛高 軍と明科 鈴音の物語は始まりを告げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1641y/>

---

変態警察 24時

2011年11月23日19時52分発行